

過去 6 年間の推薦入学を顧みて

川崎医療短期大学 看護科

片 山 美都子 和 気 馨

(昭和57年10月30日受理)

An Analytie Study on the Entrance Examination with
the Recommendation for the Past Six Years

Mitsuko KATAYAMA Kaoru WAKE

Department of Nursing Education, Kawasaki College of Allied Health Profession.

Key words

入学の選抜方法, 推薦入学の評価, 選抜入学と推薦入学の比較

概 要

川崎医療短期大学第一看護科の入学者の選抜は、開設以来本学内の併設科と合同で実施して来た。しかし、昭和52年度から、これと並行して推薦入学の制度を取り入れ、昭和57年度まで第二看護科と合同で実施している。

諸般の事情により、第一看護科のみ昭和58年度入学生から中止することになった。そこで推薦入試を行った6年間を振り返り、既存の資料をもとに、入学生の質、卒業生の就職状況について、併設科と合同で実施している選抜法により入学した学生と対比させてみた。

その結果、推薦入学の方が特に優秀な学生が得られるとは考えられなく、年に2度の入学試験を行うという労作上の煩雑さを解消するために、昭和58年度より中止したことは、時宜に即した決定であったという結論を得た。

はじめに

いずれの大学においても、自己の大学の学風にそくした優秀な学生を入学させたいとする望みは大きい。特に私立大学においては、それぞれの教育の理念にもとづき、ユニークな教育が行われている所も数多く存在する。我が川崎医療短期大学看護科も、単なる花嫁道具のための短大卒業の証書ではなく、真に臨床の場で実践のできる看護婦の育成をめざして、教育が進められて来ている。そのため、昭和48年の開設以来、本年（昭和57年）までの10年間、この理念

に即した学生の集まりであってほしいと、入学者の選抜には色々と心をくだしている。本学の入学の選抜は、入試委員会がもうけられ、開設時の昭和48年度には臨床検査科，第一看護科，第二看護科合同で，昭和52年度には放射線技術科および，医療秘書科を加え，5科共通の入学者の選抜が行われて来ている。第一・第二看護科においてはこの共通の選抜と並行して，推薦入学の制度をとり入れ，昭和57年度まで単独で実施して来た。

昭和58年度より，第二看護科は継続されるが，第一看護科は，この推薦入学の制度を中止することになった。そこで，推薦入学を実施した6年間を振り返り，入学生状況を中心に推薦入学について，その結果を検討したので報告する。ただし，昭和55年度以降の入学生は，現在在学中であるため，結果の出ていない部分のあること，また^④秘的なことはここに公表することができないため，十分なまとめにならない部分のあることを御了承いただきたい。

推薦入学をとり入れた理由

- ① 単なる短大生でなく，入学の時点より，“看護婦になりたい”という明確な目的意識をもった学生の入学が期待できるのではないか。
- ② 高等学校長の推薦であるから，合格者の入学取り消しが少なく，確実な入学者数が得られるのではないか。
- ③ 推薦入学を12月に実施すれば，受験生にとって，高等学校3年の12月中に進路が決定し，落ち着けるということで，本学入学の希望者が多くなるのではないか。

以上の理由により，推薦入学の制度が昭和52年度より取り入れられ，57年度まで実施された。

推薦入学のすすめ方

推薦入学志願者の資格及び推薦の要件は，

- ① 高等学校本年度卒業見込者であること。
- ② 看護婦としての適性を有し，学業成績B段階以上であること。
- ③ 本学入学の意志が確実であること。

の3点とし，各高等学校校長に責任をもって推薦してもらうこととした。

推薦されて来た学生数が，丁度こちらの採択数と同数であれば問題はないのであるが，多い場合は，推薦された者の中から選考せねばならなくなる。出身高等学校のレベル等，提出された書類のみでの選考は大変困難であるため，次の方法により入学者を選考した。

- ① 簡単な常識テスト
- ② 面接
- ③ 健康診断

面接は，本校が定めた評価の着眼基準にしたがい，複数の面接委員によって，5段階方式により点数化した。

健康診断は，川崎医科大学附属病院において，本学の規定に従い実施した。

調査方法

昭和52年度から57年度の入学生を対象に、既存の資料をもとに以下の9項目について検討した。

- ① 地域別入学者数について
- ② 出身高等学校について
- ③ 高等学校の内申について
- ④ 入学試験の成績について
- ⑤ 入学状況について
- ⑥ 入学後の成績について
- ⑦ 在学中の欠席、退学の状況について
- ⑧ 看護婦国家試験の合格状況について
- ⑨ 卒業後の進路状況について

調査結果

1. 地域別入学者数について

昭和52年度から57年度の入学生の出身地についてみると表1のとおりで、70%以上が中国地区であり、次いで近畿、四国、九州となっており、岡山県を中心とした隣接地域が99%以上をしめている。年度によりその割合は多少の動きがみられるが、推薦入学（以下推薦とする。）も、選抜法による入学（以下選抜とする。）も、ともに同様の傾向を示している。

表1より岡山県内在住者の割合をみると、推薦の場合は、昭和52年度は56%と県内在住者がやや多く、53年度以降は年度によりその比率に多少の動きがみられるが、県内在住者が少なくなっている。選抜の場合は、昭和52年度、53年度、56年度は県外者が多く、54年度、55年度、57年度は県内者の方が多くなっている。

2. 出身高等学校について

設置主体別にみると、私立高等学校の割合は、推薦では昭和52年度15%、54年度11%であるが、それ以外は約25%と増加している。選抜では推薦とは逆に昭和52年度35%、54年度31%と高くなっているが、55年度以降は年々減少し、57年度では5%に減少している。

岡山県内の出身高等学校をみると、表2のとおりで、私立高等学校出身者は、推薦では昭和52年度13%であったが、徐々に増加し54年度は31%、56年度は46%と高率を示し、57年度は36%とやや減少しているが、全体の1/3以上が私立高等学校出身者といえる。選抜では、52年度は50%を占めていたが、53年度30%、55年度18%と年々減少し、57年度は0となっている。推薦の方に、私立高等学校出身者が多くなっている。

表2より地域別をみると、推薦では倉敷市地区が一番多く、次いで岡山市地区となっている。岡山市、倉敷市地区を合わせてみると、昭和52年度83%、53年度50%、54年度70%と増加し、55年度は50%と減少したが、56年度73%、57年度69%と全体の2/3強を占めている。選抜では、

表1 入学生の出身地

入学年度	地域区分 選抜別	中 国						四 国					九				
		岡山	広島	山口	鳥取	島根	小計(%)	徳島	香川	愛媛	高知	小計(%)	福岡	大分	長崎	熊本	宮崎
52	推薦	30(55.6)	8	2	1	1	42(77.8)		2	1		3(5.5)			1	1	1
	選抜	4(23.5)	3	2		3	12(70.6)	1			1	2(11.7)		1			
53	推薦	18(45.0)	8	2	2	3	33(82.5)		1	3		4(10.0)				1	
	選抜	10(43.5)	2	1		1	14(60.9)		2	1		3(13.0)	1		1		
54	推薦	13(29.5)	10	1		2	26(59.1)	1	3	2	1	7(15.9)			1		
	選抜	7(53.8)	1				8(61.5)			1	1	2(15.4)					
55	推薦	22(42.3)	10	2		2	36(69.2)		2	1	1	4(7.7)	3			1	
	選抜	22(59.5)	4			1	27(73.0)		1	1	2	4(10.8)	2				
56	推薦	22(45.8)	8		1	2	33(68.8)	1	1		1	3(6.2)			2		1
	選抜	15(40.5)	9	2			26(70.3)		1			1(2.7)	1	1	1	1	
57	推薦	22(43.1)	12	4	1		39(76.4)		2	2	2	6(11.8)		1			
	選抜	13(68.4)	3	1			17(89.5)		1	1		2(10.5)					
計	推薦	127(43.9)	56	11	5	11	209(72.3)	2	11	9	5	27(9.3)	3	1	4	3	2
	選抜	71(48.6)	22	6	0	4	104(71.2)	1	5	4	4	14(9.6)	4	2	2	1	0

表2 岡山県内官公立及び私立高等学校出身者数

入学年度	高等学校名 選抜別	私立							官																
		倉敷		岡山		その他			小計(%)	倉敷市地区						岡山市地区									
		翠松	清心大学	山陽	就実	金光学園	作陽	美作		青陵	倉敷中央	児島	精研	倉敷南	天城	玉島	小計(%)	高松農業	芳泉	大安寺	操山	岡山東	岡山南	西大寺	小計(%)
52	推薦			3	1				4 (13.3)	2				1		3 (10.0)					1	1	1	3 (10.0)	
	選抜				1	1			2 (50.0)							0 (0)								0 (0)	
53	推薦	1		1	1				3 (16.7)	1	3	1	1			6 (33.3)								0 (0)	
	選抜				1	2			3 (30.0)	1					1	2 (20.0)	1	2						3 (30.0)	
54	推薦		1	1	1		1		4 (30.8)	1	1					2 (15.3)							3	3 (23.1)	
	選抜		1		1				2 (28.6)	1						1 (14.3)		1	1					2 (28.6)	
55	推薦			3	2	1			6 (27.3)	1	1			3		5 (22.7)								0 (0)	
	選抜		1		2	1			4 (18.2)	2				1	1	4 (18.2)			1					1 (4.5)	
56	推薦		3		4	2		1	10 (45.5)	1	2	2			1	6 (27.3)								0 (0)	
	選抜		1			2			3 (20.0)	2		1			2	5 (33.3)			2					2 (13.3)	
57	推薦		4		2	2			8 (36.4)	2		1		1	1	5 (22.7)					1			1 (4.5)	
	選抜								0 (0)	1				1	1	2	5 (38.5)			3	1			4 (30.8)	
計	推薦	1	7	1	14	9	1	1	1	35 (27.6)	6	9	4	1	3	3	1	27 (21.3)				2	1	4	7 (5.5)
	選抜		3		3	5	3			14 (19.7)	7		1		1	4	4	17 (23.9)	1	3	7	1			12 (16.9)

州		近 畿					そ の 他				計 (%)
鹿児島	小計 (%)	兵庫	京都	滋賀	和歌山	小計 (%)	福井	静岡	栃木	小計 (%)	
1	4 (7.4)	3		2		5 (9.3)				0 (0)	54 (100)
	1 (5.9)	1				1 (5.9)			1	1 (5.9)	17 (100)
	1 (2.5)	2				2 (5.0)				0 (0)	40 (100)
	2 (8.7)	3			1	4 (17.4)				0 (0)	23 (100)
	1 (2.3)	9	1			10 (22.7)				0 (0)	44 (100)
	0 (0)	3				3 (23.1)				0 (0)	13 (100)
	4 (7.7)	7				7 (13.5)		1		1 (1.9)	52 (100)
1	3 (8.1)	3				3 (8.1)				0 (0)	37 (100)
1	4 (8.3)	6	1			7 (14.6)	1			1 (2.1)	48 (100)
1	5 (13.5)	4	1			5 (13.5)				0 (0)	37 (100)
	1 (2.0)	4			1	5 (9.8)				0 (0)	51 (100)
	0 (0)					0 (0)				0 (0)	19 (100)
2	15 (5.2)	31	2	2	1	36 (12.5)	1	1		2 (0.7)	289 (100)
2	11 (7.5)	14	1	0	1	16 (11.0)			1	1 (0.7)	146 (100)

公 立																							計 (%)	合計 (%)		
そ の 他																										
琴	玉	鴨	笠	笠	井	矢	総	成	高	新	邑	備	閑	瀬	金	福	林	備	落	勝	川	津				
浦	野	野	方	岡	岡	原	掛	西	社	羽	梁	見	久	前	谷	戸	川	渡	野	作	合	山	上	山		
	2		1	1	1			1		1	1	2	1				2	1	1	1		2		2	26 (86.7)	30 (100)
	1																			1					2 (50.0)	4 (100)
1			1				1		2		1	1				1			1						15 (83.3)	18 (100)
	1	1																							7 (70.0)	10 (100)
					1							1	1									1			9 (69.2)	13 (100)
													1					1							5 (71.4)	7 (100)
	1							3				2	3	1							1				16 (72.7)	22 (100)
	2			1			2	2				2	1		2			1							18 (81.8)	22 (100)
	1				1	1		1				1				1									12 (54.5)	22 (100)
				1								1		1				1			1				12 (80.0)	15 (100)
						2					2	1						1				1	1		14 (63.6)	22 (100)
	1							2							1										13 (100)	13 (100)
1	4		2	1	3	1	3	1	6	1	2	6	6	3	1		4	1	2	2		4	1	3	92 (72.4)	127 (100)
	5	1		2			2		4				4	1	1	3			3		1	1			57 (80.3)	71 (100)

昭和52年度は倉敷市地区 0、岡山市地区 1 名と岡山市、倉敷市地区は少ないが、53年度は60%、54年度71%と増加し、55年度は41%と減少したが、56年度67%、57年度69%と、推薦と同様の傾向を示すようになって来た。

岡山県内の高等学校を、表 2 より設置主体別にみると、私立高等学校のほとんどは岡山市、倉敷市地区でしめており、選抜では昭和54年度以降は岡山市、倉敷市地区のみとなっている。

3. 高等学校の内申について

行動評価の A の数をみると、図 1 のように最大は 32、最小は 0 となっており、この開きの差は、推薦の方が大であった。中央値でみると、昭和52年度は推薦15.8、選抜15.0 と高値であるが、53年度以降はその数がやや減少し、推薦では 13～12 とほぼ安定しており、選抜では 10～13 と推薦と比較をすると年度によりやや動きがみられている。

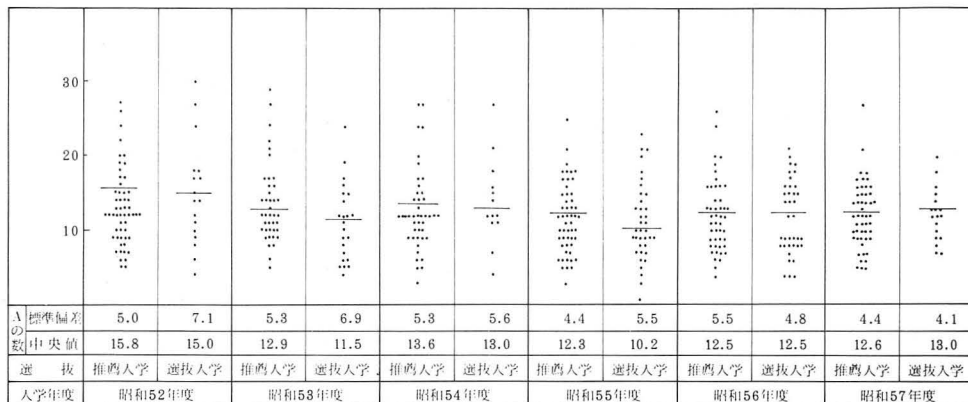
標準偏差でみると、推薦では 4.4～5.5 で年度によりあまり違いがみられないが、選抜の方は昭和52年度 7.1 を最高として、年々わずかずつではあるが数値の減少がみられ、広がりが短縮されている。

高等学校の評定よりみると、推薦では評定 A の者は 10%～33% と年度により開きがあるが、昭和56年度 10%、57年度 14% と低率である。評定 C は皆無であるが、これは推薦の条件が評定 B 段階以上とされているためである。選抜では評定 A は少なく、年度により 0%～9% 程度であり、評定 C の割合は、昭和52年度 12% 程度であるが、その後は全体の 1/3 程度をしめしている。この値よりみると、推薦の方が高等学校時代の成績の良い者が、入学しているようにみうけるが、高等学校間のレベルも考慮すべきであり、選抜の方が成績が悪いとは断定できないと考える。

4. 入学試験の成績について

推薦では最高得点、最低得点、平均点ともに昭和52年度が最高で年々低下し、56年度は最高得点が52年度に比して 100 点満点中 20 点もの開きが出た。推薦と選抜では入学の選抜方法が異なるため、比較することはできないが、選抜では、年度の差はあまりみられなかった。

図 1 高等学校内申による行動評価 A の数



面接評価については、面接委員により5段階法で採点されたものの平均点をみると、4以上をとっている者の割合は、年度により動きがある。昭和53年度において推薦が選抜より多い数をしめている外は、全て選抜の方が多く推薦：選抜の比は1：2～1：6と、選抜の方が面接評価が良くなっている。

5. 入学状況について

年度別の志願者、受験者、合格者、入学者、卒業者数は、表3のとおりである。

表3 入学状況

入学年度 選抜別		昭和52年度	昭和53年度	昭和54年度	昭和55年度	昭和56年度	昭和57年度
志願者数	推 薦	126	173	151	137	112	126
	選 抜	86	71	147	203	81	84
	計	212	244	298	340	193	210
受験者数	推薦(受験者数 志願者数)	123(98)	171(99)	150(99)	136(99)	110(98)	123(98)
	選抜(受験者数 志願者数)	74(86)	61(86)	135(92)	111(55)	74(91)	79(94)
	計	197	232	285	247	184	202
合格者数	推 薦	60	43	50	57	55	53
	選 抜	25	28	20	73	62	26
	計	85	71	70	130	117	79
入学者数	推薦(合格者数 入学者数)	54(90)	40(93)	44(88)	52(91)	48(87)	51(96)
	選抜(合格者数 入学者数)	17(68)	23(82)	13(65)	37(50)	37(44)	19(73)
	計	71	63	57	89	85	70
卒業者数	推 薦	50	38	43			
	選 抜	14	22	13			
	計	64	60	56			

志願者数は年度により相違があるが、昭和55年度以外は推薦の方が多くなっている。

志願者に対する受験者の割合をみると、推薦では98%～99%と志願者のほとんどが受験している。選抜では55%～94%であり、推薦に比して欠席者が、わずかではあるが多くなっている。

合格者数は、昭和55年度以降第二看護科の志願者が減少したので、第一看護科、第二看護科合わせて100名の入学生を確保するため、第一看護科の合格発表者数が多くなっている。

合格発表に対する辞退者の割合をみると、推薦では13%～4%、選抜では56%～18%と選抜の方が多くなっている。また、辞退者の入学試験時の成績を、合格順位でみると、推薦では、ほとんどの者が20位以下であった。選抜では、ほとんどの者が20位までの者であった。

図2 学年次別成績

第 三 学 年	90										
	80										
	70										
成 績	標準偏差	2.8	3.3	3.5	2.8	2.8	3.2				
	中央 値	77.3	78.2	78.5	78.3	78.6	80.0				
第 二 学 年	90										
	80										
	70										
成 績	標準偏差	4.4	4.5	4.7	4.1	3.9	3.0	4.8	4.6		
	中央 値	78.5	79.3	78.1	79.0	80.9	82.3	79.2	77.0		
第 一 学 年	90										
	80										
	70										
成 績	標準偏差	4.2	5.0	4.5	4.0	3.8	4.1	4.2	4.3	4.0	5.2
	中央 値	78.7	82.0	79.4	77.5	78.9	81.0	79.5	79.0	78.9	78.5
選 抜	推薦入学	選抜入学	推薦入学	選抜入学	推薦入学	選抜入学	推薦入学	選抜入学	推薦入学	選抜入学	
入学年度	昭和52年度		昭和53年度		昭和54年度		昭和55年度		昭和56年度		

6. 入学後の成績について

在学中の成績を一年次・二年次・三年次と、進級及び卒業認定の資料として使用された、各学生の平均点を図示したものが図2である。

各入学の年度ごとに、推薦と選抜を比較してみると、年度による多少の相違はあるものの、中央値、標準偏差ともに、あまり差はみられなかった。

7. 在学中の欠席及び退学の状況について

すでに卒業している昭和52年度・53年度・54年度入学生の、在学中3年間の欠席時間数について、50時間以内・50時間～100時間・100時間以上の3段階に分けてみた。昭和52年度は、推薦では50時間以内が56%、50時間～100時間が30%、100時間以上が14%、選抜では、50時間以内28%、50時間～100時間が36%、100時間以上36%と、選抜の方に欠席者が多くなっている。昭和54年度では、推薦は50時間以内77%、50時間～100時間21%、100時間以上2%、選抜は50時間以内77%、50時間～100時間8%、100時間以上15%と選抜の欠席者が減少し、以後推薦と選抜との差はみられなくなっている。

欠席の少ない者を精勤者・皆勤者の数でみると、昭和52年度では、推薦1名、53年度では推薦7名、選抜3名、54年度は推薦3名と推薦の方に多くみられた。これを学生数に対する割合でみると、推薦8.4%、選抜6.1%となるが、絶対数が少ないため、有意差はみとめられなかった。

退学者の状況をみると、推薦では昭和52年度4名、53年度1名、54年度1名、選抜では昭和52年度3名、53年度1名、54年度0名と推薦・選抜とも初年度に3～4名の退学者を出しているが、次年度からは少なくなっている。これを学生数に対する割合でみると、2:1の割合で選抜の方が多い値となっているが、有意差は認められなかった。

8. 看護婦国家試験の合格状況について

初回の国家試験に不合格となった者は、昭和52年度2名、53年度0名、54年度1名であったが、この3名はいずれも推薦入学者であった。

9. 卒業後の進路状況について

卒業後の進路について、進学・就職の別。就職者については、実習病院への就職者のうち、岡山県内出身者と岡山県外出身者の別を、すでに卒業している昭和52年度・53年度・54年度入学生でみたのが表4である。

進学の割合は、推薦では昭和52年度26%と一番多く、53年度13%、54年度14%となっており、選抜では、52年度29%と推薦と同様に一番多く、53年度14%、54年度8%と年ごとに半減している。進学の方は、保健婦学校、助産婦学校、養護教諭とすべて看護職であった。進学者以外は全員病院に就職していた。

実習病院である川崎医科大学附属病院の就職状況をみると、推薦では昭和52年度86%、53年度73%、54年度70%とわずかながら減少している。選抜では昭和52年度70%、53年度53%、54年度100%と年度により開きがみられた。実習病院への就職率は昭和52年度・53年度入学生にお

表4 卒業後の進路状況

進路 選抜 出身地			入学年度		昭和52年度		昭和53年度		昭和54年度	
			就職先		実習病院	実習病院外	実習病院	実習病院外	実習病院	実習病院外
就職	推薦	県内	18(95)	1(5)	15(94)	1(6)	11(100)	0		
		県外	14(78)	4(22)	9(54)	8(46)	15(58)	11(42)		
		小計	32(86)	5(14)	24(73)	9(27)	26(70)	11(30)		
	選抜	県内	1	0	6	2	7	0		
		県外	6	3	4	7	5	0		
		小計	7(70)	3(30)	10(53)	9(47)	12(100)	0		
	計		47		52		49			
進学	推薦	13		5		6				
	選抜	4		3		1				
	計	17		8		7				

()内は%

いては推薦の方が多いが、54年度入学生は、逆に選抜の方が多くなっている。

実習病院への就職状況を岡山県内出身者と岡山県外出身者を、表4により比較をすると、岡山県内出身者で実習病院へ就職しなかった者が、推薦では昭和52年度1名、53年度1名、54年度0名であった。選抜では昭和52年度0名、53年度2名、54年度0名となっており、推薦・選抜とも、ほとんどの者が実習病院に就職している。岡山県外出身者の、実習病院への就職率をみると、推薦では昭和52年度78%、53年度54%、54年度58%となっており、県内出身者に比べると低率を示している。選抜では昭和52年度67%、53年度36%と低率となっているが、54年度においては、岡山県内・県外出身者とも、全員実習病院に就職している。選抜は学生数が少な

表5 川崎医科大学附属病院就職者の定着状況

入学年度	選抜別	卒業者数	就職者数	退職者数 (%)					
				～6ヵ月	～1年	～1年 ～6ヵ月	～2年	～2年 ～6ヵ月	計
52	推薦	50	32	0	3(9.4)	3(9.4)	4(12.5)	3(9.4)	13(40.6)
	選抜	14	7	0	0(0)	1(14.3)	0(0)	2(28.6)	3(42.9)
53	推薦	38	24	0	1(4.2)	1(4.2)			2(8.3)
	選抜	22	10	0	0(0)	1(10.0)			1(10.0)
54	推薦	43	26	0					
	選抜	13	12	0					
計	推薦	131	82	0	4	4	4	3	15
	選抜	49	29	0	0	2	0	2	4

いため、岡山県内出身者と県外出身者を比較することは危険性があるが、推薦と同様県内出身者に比べ低率である。

実習病院就職者の定着状況をみたのが表5である。退職は、就職後6か月～1年の間に始まっている。卒業後の年数があまり経過していないので、定着をうんぬんすることははなはだ困難であるが、就職3年目を迎えている昭和52年度入学生でみると、就職1年までに7.7%、2年6カ月までには41%の者が離職しており、推薦、選抜の比較においては有意差はみられなかった。離職者を出身地別にみると、19名の離職者中13名が県外出身者であった。

考 察

1. 入学者の選抜法として推薦をとり入れたねらいが、十分達成できていたかどうかについてまとめてみたいと思う。

第一の狙いである「目的意識をもった学生の入学を、期待できるのではないか」という点についてみると、卒業後の進路においては、就職・進学ともに、全ての学生が看護の道を選んでいたこと。退学者も僅かであり、推薦・選抜の差がみられなかったこと。学業成績において、推薦・選抜の差はみられないこと。欠席時間など、学業態度による差もみられなかったことなどにより、特に推薦だから目的意識が強いとはいえない。

入学試験合格者の取り消しは、選抜の方がやや多く、入学試験の成績の上位の者に多いという点から、選抜の受験者の中には、四年制大学の併願者が含まれていることも考えられる。このことにより、選抜では初めから、看護婦になろうという目的意識を、あまり持たない者も入学しているといえるが、退学者も少なく、卒業の時点で全員が看護の道に進んでいる現状から（入学後の教育のあり方も、影響していると考えられるが）、看護婦になる目的意識の強弱の差はあるとしても、看護婦になりたいとする意志の全くない者は、受験していないのではないかといえる。これらのことにより、特に推薦の方に、目的意識が明確な者が集まってくるとは考えられない。

第二の狙いである確実な入学者数の把握の面でみると、辞退者は、推薦では1名程度であり、合格発表に対する辞退者も、選抜の1/4にすぎないという結果から、推薦の方が確実に近い数が得られるといえる。しかし、辞退者は0ではないという点よりみると、高等学校長の責任をもった推薦であっても、100%の信頼はできないともいえる。

第三の狙いである「入学生自身が、進路が早い時期に決定するので落ち着け、それが本学の入学希望数に影響するのではないか」という点では、客観的な答えを得るだけの資料がないため、今回は評価できなかった。

2. 推薦入学と選抜入学のどちらに、本学の望む学生が供給されているか、についてみてみたいと思う。

まず、受験者の内容をみると、入試の成績では、試験内容が異なるため比較することは困難であるが、推薦の場合は、年々その成績が低下しているのに比べ、選抜の方は入学年度による

差がみられない。面接評価は、選抜の方が良いという結果であった。高等学校の内申書中の行動評価Aの数は、推薦・選抜とも大差はなかった。評定A, B, C, Dについては、推薦は入試資格要件があるため、B段階以上となっているのに比し、選抜ではB, C段階になっているが、高等学校のレベルも考えられるので、一概に評価できない。このB段階以上という要件があるため推薦では、官公立の進学高校からの入学希望者を、締め出すきらいがあるのではないかと考える。

入学後の結果よりみると、入学後の成績は中央値・標準偏差ともあまり差がなかった。在学中の欠席も、昭和52年度は選抜の方が欠席者が多かったが、年度ごとに減少し、54年度には差がみられてない。退学者についても、少数であり有意差はみられなかった。以上高等学校での成績及び入学後の成績などよりみて、推薦だからといって優秀な学生が得られるとはいえないという結果となった。また、国家試験不合格者3名がいずれも推薦入学者であるということは、国家試験は、全員が合格すべきものの観点に立てみると、ここに公表はできないが、追求すべき点が残されているといえる。今回行動評価は、高等学校の評価Aの数と、入学後の評価として欠席・退学の二点にしばったが、看護婦の適性の面から追求すれば、また異なった結果が得られたかもしれないと考える。

3. 卒業後の就職状況についてみたいと思う。

進学者は年々減少し、進学者以外は推薦・選抜のいずれも、全て就職をしている。本学看護科設立の目的の一つは、実習病院である川崎医科大学附属病院で働く看護婦の育成であるため、実習病院への就職状況よりみると、就職率は、推薦では昭和52年度入学生86%, 53年度入学生74%, 54年度入学生54%と年々減少しているが、選抜では、52年度入学生70%, 53年度入学生55%, 54年度入学生100%と年度により異なっていた。出身地別にみると、岡山県出身者は、推薦・選抜のいずれも、ほとんどの者が実習病院に就職しており、推薦の就職率を下げているのは、推薦の方に県外出身者が多い結果である。定着率の面からも同様の結果が現れていた。以上のことにより、実習病院への就職率・定着率を考える場合、選抜法は無関係であり、むしろ、出身地を考慮すべきであるという結果となった。

おわりに

限られた既存の資料からの結果であるため、簡単に結論を出すことは危険性があるが、今回の調査で次のような結論を得た。

1. 一般入学より推薦の方が、合格発表に対する辞退者の数は、少なくおさえることができること。
2. 推薦を行うと、岡山県外出身者が多くなるとともに、私立高等学校の出身者が多くなること。
3. 入学後の成績は、両者とも大差のないこと。
4. 推薦を再開する場合は、入学資格要件の再検討が必要であること。

5. 実習病院の就職率を高めるためには、入学選抜方法は無関係であり、地域性が大きな要因となっていること。

先にも述べたように、第一看護科においては諸般の事情により、昭和58年度の入学生より、推薦を取り止めることに決定されたが、上記の結論より、この決定は何等の支障もなく、むしろ、年に2度の入学試験を行うという労作上の煩雑さの面が解消され、時宜に即した決定であったといえる。

なお、本学第一看護科の推薦入学について、上記のような結果を得たが、今後、社会の情勢により、再度推薦入学を実施することも否めない。その場合には、このことを充分考慮して行いたい。

稿を終わるに臨み、有益なる御助言を頂いた奥山鈴子主任教授に、厚く感謝いたします。

参 考 文 献

- 1) 氏家幸子, 砂田美津子, 依田和美; 大阪大学医療技術短期大学部看護科学生の動向Ⅲ, 学生の入学時の状況. 看護教育 15(2); 105-115, (1974)
- 2) 茂木 勇; 筑波大学における推薦入学とその follow up ; 医学教育 10(3); 142-144, (1979)
- 3) 中尾主一, 津田紀子, 瀬山和世; 看護学校の地域性と定着性について・1 看護教育 21(3); 152-159, (1980)
- 4) 中尾主一, 津田紀子, 瀬山和世; 看護学校の地域性と定着性について・2 看護教育 22(6); 378-385, (1981)
- 5) 中尾主一, 津田紀子, 瀬山和世; 看護学校の地域性と定着性について・3 看護教育 22(7); 434-443, (1981)
- 6) 中尾主一, 森ウメ子, 津田紀子, 瀬山和世; 看護学生の内申・入試・卒業成績の相関性〔1〕 看護教育 23(2), 97-103, (1982)
- 7) 中尾主一, 森ウメ子, 津田紀子, 瀬山和世; 看護学生の内申・入試・卒業成績の相関性〔2〕 看護教育 23(3), 147-155, (1982)

